

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：12603

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2018～2023

課題番号：18K00527

研究課題名（和文）ヌートカ語アハウザット方言の自然談話データベース構築およびテキスト集の作成

研究課題名（英文）Construction of a natural discourse database and text collection of the Ahousaht dialect of Nootka language

研究代表者

中山 久美子（Nakayama, Kumiko）

東京外国語大学・大学院総合国際学研究院・研究員

研究者番号：40401426

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：アメリカ先住民の言語の1つであるヌートカ語のアハウザット方言を対象として、自然談話データベースの構築拡充を行った。コロナ禍のため現地調査の実施は限られたものの、これまでの研究で蓄積された自然談話データの文法分析を進め、音声データ・語彙集とリンクさせた基礎資料としてオンラインでの公開を目指すとともにより広い範囲で活用できるようテキスト集としても刊行を予定している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ヌートカ語は他の北米大陸の先住民言語と同じく、急激に進む白人社会への同化の流れに置かれ、消滅の危機に瀕する。本データベースは言語構造のみならず、失われつつある伝統社会・技術・生活様式などを記述し、現地コミュニティでの伝統言語と文化の再活性化に向けて大きく貢献するものである。また自然談話における言語構造・機能の研究という、近年急速に重要性を増している学術的要請にも応えうるものである。

研究成果の概要（英文）：A natural discourse database has been constructed and expanded for the Ahousaht dialect of Nootka, one of the indigenous languages of North America. Even with the limited opportunities of fieldwork due to the epidemic, grammatical analysis of the natural discourse data accumulated in previous researches has been proceeded. The database, linked to audio and vocabulary data, is planned to be published online as well as in a text format in order to be able to be utilized for various purposes.

研究分野：記述言語学

キーワード：危機言語 アメリカ先住民 記述言語学 ヌートカ語

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

- (1) アハウザット・ヌートカ語は、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州南西部バンクーバー島西岸地域で話されている少数言語で、話者数は数十人ほどの高齢者に限られるという、典型的な「危機言語」である。言語再活性化に役立てるための基礎言語資料が求められているが、そうしたニーズに応えられるデータベースは極端に少ない。
- (2) ヌートカ語は、複統合性や品詞分類の不明瞭さなど、ヨーロッパやアジアの諸言語とは非常に異なる興味深い構造的特徴を持ち、その研究は単に個別言語の記述を越えた一般言語学的な意義を持つ。
- (3) 同時に、伝統社会・文化・技術・生活様式・しきたりなどについての解説が含まれた自然談話資料を整えることで現地コミュニティにおける伝統言語と文化の再活性化に向けて大きな貢献が期待される。
- (4) 研究代表者と研究分担者は、本研究前に20年以上にわたって、ヌートカ語の複数方言の調査および研究を進め、ヌートカ語諸方言の包括的文法記述・言語活動記録を長期的目標として、テキスト資料分析、文法記述などのプロジェクトを重ねてきた。
- (5) 近年の機能主義的言語学を中心とした研究潮流の中で自然談話データに基づく言語構造の研究は急速にその重要性を増している。

2. 研究の目的

- (1) アハウザット・ヌートカ語の自然談話データベースの拡充：
現地調査を通して、多様なジャンルの談話資料を収集し、既存のテキストデータベースの内容をより拡充させる。
- (2) アハウザット・ヌートカ語の文法分析：
(1)のテキストデータを、ヌートカ語の特徴である、複統合性、品詞分類など、典型的に稀有な構造を中心に、必要に応じて現地調査において母語話者の協力を仰ぎながら、その文法分析をすすめ、データベースに取り込む。
- (3) アハウザット・ヌートカ語包括的データベースの構築：
(2)の分析で得られた形態素を収録した語彙データベースを構築し、テキストデータおよび補足情報・音声・画像とリンクさせ、包括的なデータベースを構築する。
- (4) 自然な言語の使用のあり方をとらえた資料体の提供：
本研究の成果をオンラインおよびテキスト集の形で公開することにより、近年急速に重要性を増している自然談話の構造に関する研究や言語再活性化のための教材作成など、幅広い範囲の研究・社会活動に活用できる基礎資料を提供する。

3. 研究の方法

- (1) 現地調査：
研究期間の毎年度夏季に約1カ月の現地調査を行う(研究当初の予定)。調査は、カナダ、ブリティッシュ・コロンビア州、バンクーバー島のポートアルバーニにて行う。現地調査においては、母語話者と面談を行い、録音・デジタル化された音声資料を聞いてもらい、その書き起こしおよび翻訳・文法分析に協力を得る。同時に、新たな自然談話データ(物語や会話などの自然発話)の収集・録音・録画、さらに、文化・社会的背景を調査・記録するためのインタビューを行う。
- (2) 包括的データベースの構築：
テキスト資料、文法分析、音声データ、語彙データを相互リンクし、包括的データベースの構築を目指す。

3. 研究成果

(1) 研究第2年度目の10日間(8月5日~8月15日)にわたり、カナダ、バンクーバー島および言語系統的に関係の深いアメリカ合衆国ワシントン州のマカ族の地にて、現地調査を行った。現地では、母語話者や博物館関係者の協力のもと、すでに分析が進んでいるデータの文化的背景および分析内容の確認を行った。

(2) コロナ禍のもと、研究第3年度目以降の現地調査はかなわなかったが、収集・書きおこし済みの自然談話データの分析をすすめ、文法分析を加えたテキストデータ、音声データ、語彙集をリンクさせ、包括的データベースの拡充を行った。

(3) 本研究で分析・処理を行った自然談話資料は、伝説、昔話、歴史的な出来事についての語り、伝統社会・文化・技術・生活様式・しきたりの説明など多岐にわたり、これをデータベース化することで、言語研究のみならず、伝統社会・生活、地域の歴史などに関する研究、および現地コミュニティでの伝統言語・文化の再活性化など、広い範囲での研究・活動に活用されうる知的資源の蓄積という大きな成果をあげることができた。

(4) 研究最終年度の1月にはアメリカ、カリフォルニア大学サンタバーバラ校での国際シンポジウムに参加し、自然談話データを用いた文法研究に関して意見交換・議論を行った。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計11件（うち査読付論文 5件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 Horiuchi Fumino, Nakayama Toshihide | 4. 巻 39(1) |
| 2. 論文標題 Commas as a constructional resource: the use of a comma in a formulaic expression in Japanese social media texts | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 Journal of Japanese Linguistics | 6. 最初と最後の頁 145-163 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 長谷川晶一、中山俊秀他 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 VRを活用するメタバースコミュニティの理解にむけて | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 第28回日本バーチャルリアリティ学会大会論文集 | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である) | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 中山俊秀 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 適応することば：内的要因による言語変化 | 5. 発行年 2023年 |
| 3. 雑誌名 菊澤律子、吉岡乾 (編) 『しゃべるヒト：ことばの不思議を科学する』 | 6. 最初と最後の頁 240 - 247 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|--------------------|
| 1. 著者名 小川芳樹, 中山俊秀 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 変化・変異・進化の事実に向き合う種々の言語理論 必要なのは対立か, 対話か, 連携か | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 小川芳樹, 中山俊秀編 『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論3』 | 6. 最初と最後の頁 1-28 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 中山俊秀 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 言語の多様性が教えてくれること：言語システムの動的性質と文脈依存的性質 | 5. 発行年 2022年 |
| 3. 雑誌名 日本音響学会第148回研究発表会論文集 | 6. 最初と最後の頁 - |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|--------------------|
| 1. 著者名 中山俊秀, 大谷直輝 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 用法基盤モデルの言語観 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 中山俊秀, 大谷直輝 (編) 「認知言語学と談話機能言語学の有機的接点」 ひつじ書房 | 6. 最初と最後の頁 3-25 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|---------------------|
| 1. 著者名 中山俊秀, 大谷直輝 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 認知言語学と談話機能言語学 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 中山俊秀, 大谷直輝 (編) 「認知言語学と談話機能言語学の有機的接点」 ひつじ書房 | 6. 最初と最後の頁 27-48 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|---|-----------------------|
| 1. 著者名 Toshihide Nakayama, Fumino Horiuchi | 4. 巻 172 |
| 2. 論文標題 Demystifying the development of a structurally marginal pattern: A case study of the wa-initiated responsive construction in Japanese conversation | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 Journal of Pragmatics | 6. 最初と最後の頁 215-224 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1016/j.pragma.2020.11.018 | 査読の有無 有 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-----------------------|
| 1. 著者名 堀内ふみ野, 中山俊秀 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 発話頭の「ハ」成立の動機付け - 動的文法観に基づく一考察 - | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 田中廣明他 (編)「動的語用論の構築に向けて」開拓社 | 6. 最初と最後の頁 176-197 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 中山俊秀 | 4. 巻 1 |
| 2. 論文標題 「通じる」ためのリソースとしての文法 | 5. 発行年 2020年 |
| 3. 雑誌名 社会言語科学会第44回大会発表論文集 | 6. 最初と最後の頁 307 - 308 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

| | |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名 中山俊秀 | 4. 巻 18 |
| 2. 論文標題 言語知識はどのような形をしているのか | 5. 発行年 2018年 |
| 3. 雑誌名 日本認知言語学会論文集 | 6. 最初と最後の頁 580 - 585 |
| 掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし | 査読の有無 無 |
| オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著 - |

〔学会発表〕 計24件 (うち招待講演 9件 / うち国際学会 11件)

| |
|--|
| 1. 発表者名 Toshihide Nakayama |
| 2. 発表標題 How far can we go with the clause? |
| 3. 学会等名 18th International Pragmatics Conference (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Fumino Horiuchi, Toshihide Nakayama |
| 2. 発表標題 Mobilizing syntactic rules for discourse organization: A case study of utterances starting with a dependent element in Japanese |
| 3. 学会等名 18th International Pragmatics Conference (国際学会) |
| 4. 発表年 2023年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Toshihide Nakayama |
| 2. 発表標題 What 'grammatically deviant' patterns can tell us about grammar |
| 3. 学会等名 International Symposium on Rethinking Grammar (国際学会) |
| 4. 発表年 2024年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中山俊秀 |
| 2. 発表標題 文法体系の拡張：逸脱構文の発達事例から考える |
| 3. 学会等名 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同利用・共同研究課題「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」2022年度第2回研究会 |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中山俊秀 |
| 2. 発表標題 言語の多様性が教えてくれること：言語システムの動的性質と文脈依存的性質 |
| 3. 学会等名 日本音響学会第148回研究発表会（招待講演） |
| 4. 発表年 2022年 |

| |
|----------------------------------|
| 1. 発表者名 堀内ふみ野, 中山俊秀 |
| 2. 発表標題 ただの点、だけどね：構文構成素としての読点 |
| 3. 学会等名 日本言語学会第162回大会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中山俊秀 |
| 2. 発表標題 用法基盤アプローチが関心を向ける「語」のリアリティ |
| 3. 学会等名 東京外国語大学AA研共同利用・共同研究課題「理論言語学と言語類型論と計量言語学の対話にもとづく言語変化・変異メカニズムの探求」 2021年度第2回研究会 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Toshihide Nakayama, Fumino Horiuchi |
| 2. 発表標題 "Structural incompleteness" as a communicative strategy: What motivates utterances starting in the middle? |
| 3. 学会等名 16th International Conference of the European Association of Japanese Studies (国際学会) |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 中山俊秀 |
| 2. 発表標題 『周辺の』文法パターンは文法研究をどのように広げてくれるのか |
| 3. 学会等名 日本英語学会第39回大会特別講演（招待講演） |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中山俊秀 |
| 2. 発表標題 扱いにくいデータが教えてくれること：逸脱的構文が明らかにする文法システムの文脈依存性 |
| 3. 学会等名 AA研フォーラム：『アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築』 |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 中山俊秀, 堀内ふみ野 |
| 2. 発表標題 ネタさえあれば、だけどね：読点を含めた定型表現研究の可能性 |
| 3. 学会等名 International Symposium on Formulaicity in Interactional Discourse |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 堀内ふみ野, 中山俊秀 |
| 2. 発表標題 発話を超えて発達した定型性一係助詞八で始まる発話 |
| 3. 学会等名 International Symposium on Formulaicity in Interactional Discourse |
| 4. 発表年 2021年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Toshihide Nakayama, Fumino Horiuchi |
| 2. 発表標題 Dynamic emergence of referents in conversation |
| 3. 学会等名 16th International Pragmatics Conference (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Toshihide Nakayama |
| 2. 発表標題 Reexamining the Complexity of Collaboration in Documentation and Revitalization Research |
| 3. 学会等名 International Interdisciplinary Conference 2019 "On the Move: Indigenous Knowledge, Language and Culture, Tourism and Creative Economy in Asia and Beyond" (国際学会) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中山俊秀, 伝康晴, 細馬宏通, 木村大治 |
| 2. 発表標題 言語創発学の試みー言語の個人基盤と社会性をつなげるインターフェイスの解明に向けてー |
| 3. 学会等名 社会言語科学会第44回大会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 中山俊秀 |
| 2. 発表標題 言語の類型化の面白みと落とし穴 |
| 3. 学会等名 東北大学大学院情報科学研究科言語変化・変異研究ユニットチュートリアル(招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 中山俊秀 |
| 2. 発表標題 ヌートカ語(カナダの消滅危機先住民言語)の魅力と深み- ちょっと「想定外」の文法を楽しむ |
| 3. 学会等名 東北大学大学院情報科学研究科言語変化・変異研究ユニット講演会(招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 中山俊秀 |
| 2. 発表標題 言語創発学への道のり |
| 3. 学会等名 第16回 話しことばの言語学ワークショップ (招待講演) |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 中山俊秀 |
| 2. 発表標題 多様な個人の多様な文法がまとまるメカニズムを考える |
| 3. 学会等名 「文法の動的体系性を探る (1): 文法の多重性と分散性」2019年度第1回研究会 |
| 4. 発表年 2019年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Nakayama, Toshihide |
| 2. 発表標題 Reflections on working with an endangered language community in Japan |
| 3. 学会等名 Third International Conference on Documentary Linguistics - Asian Perspectives (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Nakayama, Toshihide |
| 2. 発表標題 Problematizing language and revitalization: Why language documentation hits a wall in revitalization |
| 3. 学会等名 International Symposium on Approaches to Endangered Languages in Japan and Northeast Asia: Description, Documentation and Revitalization (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Nakayama, Toshihide |
| 2. 発表標題 Reframing referentiality in interaction: From 'pointing' to 'synchronized attention' |
| 3. 学会等名 International Workshop on Referentiality (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|---|
| 1. 発表者名 Nakayama, Toshihide |
| 2. 発表標題 Multiplicity in grammar: How do we need to change the way we think about grammar? |
| 3. 学会等名 Japanese/Korean Conference: Pre-conference workshop on Multiplicity in Language and Multiple (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

| |
|--|
| 1. 発表者名 Nakayama, Toshihide |
| 2. 発表標題 Different ways of contributing to conservation and revitalization of language and culture |
| 3. 学会等名 Workshop on conservation and revitalization of community language and culture (招待講演) (国際学会) |
| 4. 発表年 2018年 |

〔図書〕 計3件

| | |
|----------------------------------|-----------------|
| 1. 著者名 小川芳樹, 中山俊秀 | 4. 発行年 2022年 |
| 2. 出版社 開拓社 | 5. 総ページ数 445 |
| 3. 書名 コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論 3 | |

| | |
|--|-----------------|
| 1. 著者名 Sumittra Suraratdecha, Toshihide Nakayama | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 John Benjamins | 5. 総ページ数 122 |
| 3. 書名 Documentary Linguistics: Working with Communities | |

| | |
|---|-----------------|
| 1. 著者名 中山俊秀, 大谷直輝 | 4. 発行年 2020年 |
| 2. 出版社 ひつじ書房 | 5. 総ページ数 395 |
| 3. 書名 認知言語学と談話機能言語学の有機的接点：用法基盤モデルに基づく新展開 | |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

| | 氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号) | 所属研究機関・部局・職 (機関番号) | 備考 |
|---------------|---|---|----|
| 研究 分担 者 | 中山 俊秀 (Nakayama Toshihide) (70334448) | 東京外国語大学・アジア・アフリカ言語文化研究所・教授 (12603) | |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| | |
|---------|---------|
| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|